

先の大戦を巡って毎年多くの追悼式・慰霊式が行われるが、このうち首相が参列し式辞を読む国家的行事が六月二十三日、八月六日、九日、十五日にある。いずれも戦争の犠牲者をしのび、平和の思いを新たにすものだ。あいつ文が定型的で気持ちこもっていないなどの批判があることも、今日の日本社会における国のかたちの原点が第二次世界大戦の反省に立つことを表していることに間違いはなからう。

開催地以外のテレビや新聞の報道は、式典の様子を淡々と伝える定例的なものともいえる。この一年半に遠い国での戦争報道が日常化したのに反比例するように身近なはずの戦争体験は希薄化し、加害や被害の歴史を伝える記事や番組が記念日報道や八月シヤーナリズムと揶揄され、報道現場でも疎まれる状況にある。

戦争体験者が数少なくなり、伝承も非体験者から非体験者が当たり前になっている今、式典に対する関心も薄まっており、いつかの主権でなくなることもわからない。あるいは積極的に戦争に関与する「普通の国」を目指し中で、あえて負の体験をローアツプすることを嫌がる政治家が出てきてもおかしくない。実際、今年が巨年を迎える関東大震災時の朝鮮人虐殺の事実さえも、歴史の上書きが現在進行形で進んでいる。大きなきっかけは、事件現場の首長である東京都知事が追悼文を送らないという不作為である。

さらにいえば、沖縄・広島・長崎に匹敵する十万人以上が犠牲となった東京大空襲の記憶と記録も、積極的な伝承の手当てをあてていないことで、自然に消えていくことを待っているかのようだ。こうした「消極

# 遠い戦争 近い戦争



専修大学教授 山田 健太

## 時代を読む

的な加担」が、声高な「積極的な扇動」により大きな力を与えている。

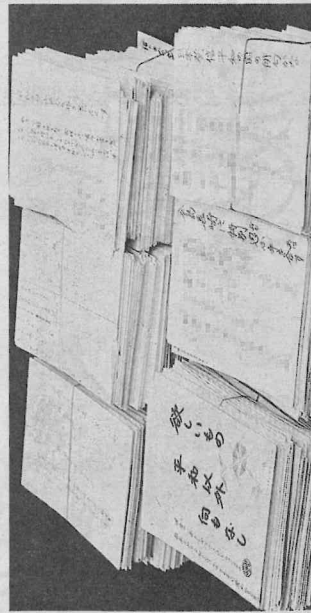
もちろん、流れにさおさすような動きばかりでなく抗う力もある。戦争体験者の遺族から、譲り受けた遺品の寄贈が増えているという。一部の自治体や市民運動でも資料収集などが活発化しているし、広島の実爆ドームや資料館のような戦争遺跡やアーカイブスの存在は、記憶が常に呼び起こされ、伝承活動の起点にもなりやすい。

沖縄のひめゆり平和祈念資料館の説明員や、平和の礎での平和ガイドのように、体験者のインタビュー映像や残された具体的な言葉を忠実に紹介することで、人となりを追体験し惨劇を伝えることに成功している事例もある。筆者が勤める大学には正規授業で現地実習「沖縄シヤーナリズム論」があり、毎年、学生と一緒に話をうかがう機会を持っているが、若い世代に確実に言葉が紡がれていることは目でも実感する。

戦争体験も顔見知りが多いような狭い地域であるほど表に出づら。沖縄でも日本軍への協力、慰安所の設置、集団自決の惨状など、口をつぐんできた事実を知る術が日一日と少なくなっている。しかも、教育現場で近現代史は高校まで十分に扱われない上、受験科目でない日本史の勉強もおろそかになりがちだ。

だからこそ教科書の一項目としてではなく、そこで失われた個々の命に思いをはせ、社会的、政治的背景も含めて多層的に学ぶ機会として、身近な戦争は格好な題材である。定型的な式典であっても、過去を見つめ現在を自覚し将来に生かすための貴重なきっかけとして、きちんと継承し報じていくことが大切だ。

2023.7.23



届けられた「平和の俳句」の応募作(一部画像処理)

平和について自由な発想もらう「平和の俳句」。今年より五百二十四句多い六千六句の応募があり、三十句きました。選者は作家のいとうさん(ふく)、俳人の夏井(なつ)さん。八月、本紙に掲載

作品を私も拝読しました。が見えないロシアによる侵襲、核兵器が使われる恐れに岸田政権による敵基地攻

# 「知中派」も敵に回す拘束

週のはじめに考える

今春、中国駐在典型的なるぞしよ、バク送還、役六年の、国した百